



第七回 追憶



服飾評論家
市田ひろみ

Bさんは、九十才を過ぎているだろうか。両手に杖を持って、ゆっくりと散歩。

奥様が、つかずはなれず2m位後をつけてあるく。

Bさんは高名なフランス文学者だ。著作も多い。

或る日、私が自宅マンションへ帰ると、Bさんは珍しく一人でゆっくりと大理石の玄関の三段の階段をあがるうとしていた。

大丈夫かな？ あっと思った瞬間、Bさんは前のめりに階段に倒れた。

私は、走り寄って抱きおこそうとしたけど重い。「誰か——」。その時配達の人が来て一緒に抱きおこした。

杖を渡した。「ありがとう」と言うと、Bさんはエレベーターの方へ行った。

数日後、Bさんの奥様に出逢ったら「この間はありがとう」とおっしゃった。

その後二カ月、Bさんのお散歩姿を見ないと思ったら入院してらっし

やるこのことだった。

そして五月頃、Bさんは亡くなった。

残された奥様一人。大きな部屋はきつと淋しいことだらう。

そんな或る日、新聞の不動産の広告にBさんの部屋が売りに出ているのを見つけた。

すでにBさんの後をついてあるく奥様の姿も見えていない。

やがて暑い夏が来て、奥様はどうしていらっしやるかなあと思っていた時、ロビーで奥様を見かけた。

「家も売って、身のまわりの物だけでもってパリに帰りま

す。行くとは言わず帰るといいう言い方だった。「パリが一番

長く暮らした町だし、友達も多いし……」。

奥様にとつて夫と長く暮らした町。パリの風も町並も何よりもBさんの研究はこの町にいて実ったものだ。でも若い時ならともかく、八十才を過ぎての移住。

残された時間を奥様は、Bさんの思い出を抱きながら生きようとしているのだ。

もう私にはカルチエ・ラタンをあるく奥様の姿が見える。暮らしの中にBさんと暮らした追憶は、よみがえっているのだろうか。

